

## パンと同級生

私は米派ですので、給食でパンが出ると手放して喜べないのが正直なところですよ。しかし、食器に載ったパンを見るたびに、思い出すことがあります。現代では考えられないことですが、「昔はそんなふうだったのか」と軽い気持ちで読んでください。私が中学生だったころですので、四十五年以上も前のことですね。そのころは毎日がパンでした。食パンやコッペパンが毎日出ていました。今日の黒糖パンのような味がついたものはなかったと記憶しています。おなかのすいた中学生にとっては、パンも大事な食糧です。米派の私も喜んで食べていました。

「毎日パン」ということは今では考えられないことでしょうが、もう一つ、考えられないことがありました。それは、欠席した仲間に、給食のパンを包んで届けていたということです。今では絶対にできませんよね。それができなくなったのは、確か、一九九六年大阪の小学校の給食で、病原性大腸菌O157による大規模な食中毒事件が起きたことがきっかけでした。それ以来、給食の持ち帰りはできなくなりました。

私の中学時代はその事件が起きる前ですので、欠席した時はパンが届けられていたのです。流行性の結膜炎を患い、一週間出席停止になった時には、毎日パンが届けられました。届けられたのはパンだけではありません。毎日の配付物、学級の仲間からのメッセージ、そして、パンをもってきてくれた仲間が語るその日にあった面白話……一週間も休んでいると、それらを運んでくれる仲間も入れ代わり立ち代わり新しい顔ぶれになります。その時の喜びを、当時よく聴いていたラジオ番組に投書し、憧れのDJ（今で言うと、パーソナリティーかな）に読んでもらえた感動を今でもよく覚えています。

給食のパンを見るたび思い出すのは、パンを運んでくれた同級生のことです。あの頃は、下校時間が近づく、そわそわしていましたね。もうすぐパンをもって仲間が来てくれると思うとワクワクしました。いつも給食で食べているパンでしたが、仲間が届けてくれたという味付けで、私にとっては格別の味がしました。

当時は、このように仲間が気にかけて訪問してくれました。担任はというと……記憶に残っている限りでは、欠席した日に電話で話した覚えはありませんね。その分、パンをもってお見舞いに行くように手配してくれたのかもしれないけどね。

今の時代は、私のころとは全く逆ですよ。仲間は塾や習い事などで忙しい。その分、担任が欠席者に電話をかける。今と昔、どちらがよいかは私にはわかりません。しかし、どちらにしても、心配してくれる人がいるということがうれしいことです。面会や連絡を当たり前と考えず、感謝の気もちを忘れないようにしたいですね。

（四月二十八日 記）